



学堂・学童・さざめき・鏡像展開 No.2 110×110cm 2003年

宇佐美圭司ドローイング展

Ⅲ

2023.7.15 (Sat) ~ 8.6 (Sun)

■アクセス■

・東武伊勢崎線足利市駅徒歩 12分・JR 両毛線足利駅徒歩 8分

・北関東自動車道足利ICより 15分 (駐車場 3台あり)

※近隣にも無料駐車場があります。

■11:00~18:00 (最終日は 16:00 まで)

月・火曜休廊 (月・火が祭日の場合は営業し、翌日休)

■軽食とソフトドリンクもお楽しみいただけます。



artspace & café

〒326-0814 栃木県足利市通2丁目 2658

Tel : 0284-82-9172

E-Mail : info@artspace-and-cafe.com

URL : <http://artspace-and-cafe-ashikaga.com/>



光の舟 35×53.5cm 2003年



その時集合と離散が交錯する 60.1×87.4cm 1999年

宇佐美圭司 (1940-2012) は、1960年代の米国での市民の暴動を撮影した一枚の報道写真から抽出した4つの人型で画面を構成するユニークな仕事で知られた作家である。その油彩作品は、隅から隅まで機械で描いたように精緻な形と均質または超絶技巧的なグラデーションの彩色を特徴としていた。

東京国立市のアトリエに私が通うようになった頃、いつも宇佐美圭司は建築家のように製図板のような板に貼られた紙に向かっていて、1978年に始まる『100枚のドローイング』の時代である。なぜドローイング?と不思議に感じるほどドローイングに集中していた。<歴史に参入するために現代美術の作家になった>と公言する宇佐美圭司でありながら、(より冒険的に言えば)なぜ鉛筆とペンとインクと水彩によって歌う画家に戻ろうとするのか?と私には不思議に思えた。

けれども完成したドローイングはどれも素晴らしいものだった。宇佐美圭司のドローイングには極めて繊細な音調と響きがある。筆を握る指先の振動が、色彩が滲み越境して拡がりゆく空間が、宇佐美の油彩の大画面とは別の世界を表現しているのだった。おそらく宇佐美圭司は、歴史に参入する使命を担う現代美術とは異なる<いま、ここ>という喫緊の生をそこに留めようとしていたのだろう。

これらのドローイングの達成以後、宇佐美圭司の大画面の油彩絵画は最晩年に至るまで、指先のバイブレーションは腕のアクションとして、画家として歌う姿勢を強めていった。画家であり現代美術作家である宇佐美圭司がそのときどきに留めのこしたドローイングは、いまでも変わることなく生の声が聞こえてくるような美しさに満ちている。

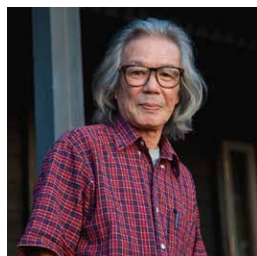
難波英夫 (セゾン現代美術館名誉館長)



石のしずく 72×53cm 1998年



琵琶の音がする 72×52.5cm 1995年

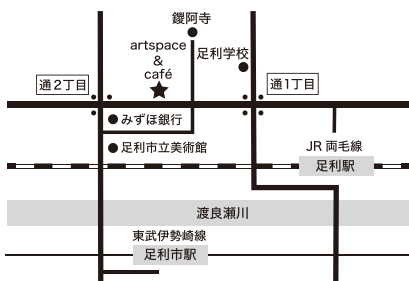


越前のアトリエにて 撮影: 岩本圭司

宇佐美圭司 Keiji Usami

1940年大阪生まれ。1963年初めての個展を南画廊で開催。1965年「新しい日本の絵画と彫刻展」に出品(ニューヨーク近代美術館)。1967年第5回パリ青年ビエンナーレ(パリ市立近代美術館)に日本代表として出品。1969年「レーザー・ビーム・ジョイント」展をジュイッシュ美術館(ニューヨーク)で開催。1970年「Expo' 70」鉄鋼館、スペースシアター設計のための美術監督となる。1972年ヴェネツィア・ビエンナーレ日本館で個展を開催。1989年第22回日本芸術大賞受賞。1992年「宇佐美圭司回顧展 世界の構成を語り直そう」を開催(セゾン美術館、大原美術館、ライカ本社ビル)。2001年「宇佐美圭司・絵画宇宙」展を開催(福井県立美術館、和歌山県立近代美術館、三鷹市美術ギャラリー)。2002年芸術選奨文部科学大臣賞受賞。2012年「宇佐美圭司 制動・大洪水」展を開催(大岡信ことば館)。2012年10月逝去。

多摩美術大学芸術学科助教授、武蔵野美術大学油絵科教授、京都市立芸術大学教授など歴任。『絵画論』(筑摩書房)他、著作多数。



artspace & café

〒326-0814 栃木県足利市通2丁目2658

Tel : 0284-82-9172

E-Mail : info@artspace-and-cafe.com

URL : <http://artspace-and-cafe-ashikaga.com/>